

二十一世紀の仏教と私の役割

聖母女学院短期大学助教授
延暦寺学園叡山学院教授

星 宮 智 光

今世紀に入り科学技術は想像のおよばない規模と急速さで発達しつつあり、政治体制の如何にかかわらず、これによって人間の生活もまた大きな変化をみせている。この変化の世紀といわれるなかで、とくに特徴的な傾向は、われわれの生活が地球的規模のなかで営まれていくことである。交通運輸、通信の発達、経済構造の国際化は地球上の物理的な地図を無意味なものにしている。オーストラリア産の生鮮食料品

がわずか一日で日本に空輸され、ワシントンの出来事がもう一時間後には東京の経済市場を左右する。地球は一つであるという実感は、今日のわれわれの生活のいたるところで経験する。このような地球的一体化という現象はあらゆる面で今後いつそう促進されていくであろう。もはや一国家や一部階級の利益をのみ優先させるような政治経済倫理などはもはや時代錯誤として捨てられることになろう。政治経済はいち

はやく国際協力が成立し、一種の地球政治、地球経済といった理念がいつそう現実味をおびてくるはずである。今日、日本経済の繁栄とともに国際摩擦が生じ、貿易の黒字減らしが真剣に問われているのも、こうした兆しの一つである。

二十一世紀は地球一体化の時代である。さらに宇宙的一体化をさえ予想しなければならぬだろう。そして、その一体化現象のなかで、もっとも重要なものとして徹底した平等思想、個人間を問わず国際間を問わず、あるいは山川草木を問わず、あらゆる存在の尊厳とその平等を信念とする倫理でなければならぬ。国益の優先とか、国家間の差別、人権の無視、人間本位の自然観といったやりかたからは真の地球的一体化の政治経済は実現するはずもなく、そのような価値観は結局は矛盾を生み自己崩壊をもたらすであろう。しかし、政治経済の面では平等観が徹底し地球的一体化の倫理が実現するの

は、そのもたらす結果が直接的かつ現実的であるだけに案外容易ではないかと考えられる。

これにたいして、おそらくもつとも頑迷に対立と葛藤をつづけるのは、文化や言葉の面であり、また諸宗教、イデオロギーの対立ではないかと思われる。現に、今日の世界中の紛争を見ても、それらには何らかの宗教的対立がはらんでいるのに気づくはずである。言語のちがいによる障害、文化価値の異なることよって生ずる誤解と対立葛藤、信仰する宗教が相違することよって生み出される蔑視と憎悪、こうした対立をいかにして克服するか、普遍的な平等思想によつて真の地球的宇宙的融和を実現し、人類をはじめ悉有のなかにいかにして平和と福祉をもたらすか、これが二十一世紀の人類の課題でなければならぬ。

こうして、二十一世紀の仏教は、この人類の課題にたいして応答し、新しい道を率先して創



造するものでなければならぬ。大乘仏教では臨機応変とか対機説法とかいい、また時機相応ともいって、時代の相と時代の人びとの求めるところを重視する。大乘仏教にいたるまでの仏教の歴史は、このことを如実に教えている。鎌

倉時代の祖師がたは末法という時代認識を根拠として仏教の新しい展開を選択したことは周知のとおりである。二十一世紀の仏教は正しく深く二十一世紀の地球一体化の状況を凝視しなければならぬ。頑迷に潜在しつづける文化的誤解、言語的障害、諸宗教やイデオロギー的対立、これらのものをいち早く解氷する役割を担わなければならない。そのためには、まず第一に率先して自己僧伽の変革を行い、地球的一体化の方向に創造的に参加しなければならない。

では、二十一世紀の仏教のなすべき自己変革と時代にたいする創造的参加とは具体的にはどんなことであろうか。これにたいして、一日本仏教僧としての若干の私感を次にのべてみたい。

まず、第一は自己の宗教のみを絶対視せず、諸々の宗教にたいして寛容と共存をもって接することである。仏教には古来から教相判釈という

ものがあり、自宗の優越性を弁証する論理があった。天台宗の五時八教という教判はその典型である。自己の信心の形成にはもちろん教判は必要であるが、これを短絡的に普遍化し絶対化することは危険である。教判はむしろ相手宗教への深い理解の方法でなければならず、他宗教をみずからに摂受するための発想として展開されなければならぬ。日本仏教における習合思想というものは、この点、高く評価したい。一九八七年夏、比叡山で開催された宗教サミット会議の成功は、二十一世紀の宗教相互の融和と協力という点で、宗教史における一大金字塔というべきであり、二十一世紀の仏教のありようを示唆していて興味ぶかい。宗教相互の寛容と融和の思想にたいして、仏教は鋭く深い発想を提供することができるし、また仏教の歴史においてその好例を多く残している。

第二は、仏教の国際化である。仏教の中国化、

仏教の日本化という現象、あるいは仏教のアメリカへの土着化などがさまざまに論じられてきた。そしてその動向は一方において必要であり必然でもあった。しかし、いま二十一世紀の仏教を探求しようとするとき、脱日本仏教運動が求められているのである。中国仏教を脱しえたからこそ、仏教は日本に根付くことができた。同じように、日本仏教の特殊性を強調するのではなく、その世界的人類的普遍性を掘り起こし、地球上のすべての人びとに受け入れられる仏法真理を説き実践するのになければならない。鎮護国家の仏教にのみとどまるのであっては、世界宗教とはいえない。二十一世紀の宗教としては時代おくれであろう。国家の枠を超えて、世界衆生を再発見し、世界の衆生とともに歩むのになければならない。日本文化にとじこめられた宗教としてではなく、もはや地球一体の時代にふさわしい、世界衆生の救済と福祉を実現す

るものでなければならぬ。これが仏教の国際化である。キリスト教者、イスラム教者、儒教信奉者、あるいは民族宗教者、いかなる宗教の信者とも出会うことができ、対話し、融和できる仏教、かれらとともに人類的福祉と地球的宇宙的平和を実現できる仏教をめざす。これが仏教の国際化である。

第三は、三蔵すなわち経律論を世界民衆の言語によって説くことである。これには二つの側面がある。一つは經典を従来の漢文あるいはサンスクリット、パーリ等の古典語から脱出させて、日常語によって説くことである。釈尊の言葉、高僧の語句は尊く神聖であるが、それは意味内容に価値があるのであって、これを呪文のごとく誦することは無意味である。思いきって現代日常語によって表現すべきであろう。鎌倉のころ、法然上人も道元禪師も漢文を脱して、和文で法を説いたのである。これは新しい時代

に臨むものに大きな示唆である。もう一つは、世界民衆にわかる仏法を説くという点で、三蔵の英語訳を促進することである。地球上でもっとも流通しているのは英語である。英語はおそらく二十一世紀の地球語になると思われる。二十一世紀の仏教は英語による仏教でなければならぬだろう。明治以来の日本仏教界がなしえた最大の事業は、大正大藏經の編集出版であったといえる。二十一世紀の仏教をより現実的にするためには、この大藏經の英語訳の作製事業から開始したいものだ。英語事業を進めてゆく過程のなかで、さまざまな困難が生じるはずである。しかし、それらの困難な問題を解決し克服する過程自体が実は二十一世紀仏教の形成であるといふべきであろう。

他にも私感¹は山積しているが、しかし最も大事なことは、二十一世紀の仏教探求の核心は、源泉は自己の修証であるということである。